The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴルにおける食の慣習と社会的関係 ： 肉の分配から読み解く
Author(s)	ビャンバドルジ, S.
Citation	GLOCOLブックレット. 2014, 16, p. 37-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

3

モンゴルにおける食の慣習と社会的関係
肉の分配から読み解く

S. ビャンバドルジ
モンゴル国立大学社会科学学部社会文化人類学研究室　講師

モンゴルの遊牧民は草原の生活、生命、環境、気候に適合した食文化・慣習を創造し、継承してきた。多くの人類学者がモンゴルの食をテーマに研究を行ってきたが、食の技術、調理、伝承など研究テーマに偏りがあると思われる。食文化・慣習は自然環境、社会関係を象徴するものであり、モンゴルの食文化は、モンゴル人の思想やコミュニケーションの特性の伝統的継承と表現そのものである。本稿では主に19世紀末から20世紀半ばを対象期間とした人類学の文献に依拠し、記述した。

モンゴルの食の基礎構造と伝統食のピラミッド

伝統的遊牧生活のスタイル及び形態によると、モンゴルの食の構造は主に①白い食②肉③調味料としての草④小麦と米の４種類である。

白い食とは五畜（ウマ、ウシ（ヤク）、ヒツジ、ヤギ、ラクダ）の乳、及び乳から加工される乳製品を指し、肉には五畜の肉、頭、四肢肉、内臓肉とそれ以外に、野生動物の肉、内臓肉の一部、地域によっては魚も含まれる。

調味料用の草は重要な役割をもつ。野生葱、ニラ、ターナ、フムール、ハリャル、マンゲル（ターナ、フムール、ハリャル、マンゲルはニラの一種である）などを調味料として利用する食の慣習は、肉のタンパク質を消化させ、脂肪と有毒物質を排出させる効用があり、肉の摂取により発生する酸及びアルカリ濃度を調節し、身体を保護する。なお、モンゴル人による麦類の利用は20世紀半ばから非常に増えてきている。

ここからは我々モンゴル人の社会関係の象徴が最もよく読み解くこと

ができる、肉食文化に関連する慣習について簡単にみてゆく。

モンゴルにおける遊牧民の伝統食をピラミッド構造に例えると、夏季は食ピラミッドの土台に白い食があり、調味料用の草はピラミッドの頂点に位置している。一方、冬季は土台が肉食であり、食の利用方法は季節により異なることがわかる。これは、モンゴル人の生活文化、気候に起因するほか、モンゴル人が食べものの成分を理解し、身体の特徴に適合させてきた伝統的知識及び素養と関係している。あるいは、大陸性で四季の温度差が非常に激しいモンゴルにおいて、夏と秋の暑気には肉食を控え、白い食を摂取し、冷たい肉と言われるヤギ及びラクダの干し肉を時折食べるが、冬と春の寒気にはカロリー及び脂肪分の多い、羊肉、馬肉、牛肉を食べる。特に、厳寒期（12月～1月）には熱い肉である馬と羊の肉を食べる。馬肉は風邪や咳などを予防し、治療、体力強化、免疫力向上の効果がある。冬の肉食は主に羊肉であり、牛肉は、干し肉として春夏に食するという事実から考えると、モンゴル人の肉食は季節ごとに細かく利用法が分類されていると言える。

モンゴルで最も象徴的に重要な食料は肉であるが、肉の取り扱い方に関する慣習はとりわけ複雑である。モンゴルの人々は、動物の生命を絶てば、その動物のあらゆる部位を利用しなければならないと認識しており[1]、肉の部位には細かな規則がある。こうした肉食と分配の伝統は、とりわけモンゴルの訪問と招待の文化の中にとりわけ顕著に見出される。モンゴルでは、家に訪問する基本的習慣を「まだらのお椀より、まだらの馬」[2]、「何をもって豊かか、それをもってごちそうする」などの諺によって定義できる。

もてなされる方では、肉の分配から、もてなす側ともてなされる側の差異が見受けられる。それはなぜか。13世紀、モンゴル人は分配された肉を一人で食し、食べきれなかった肉は袋に入れて持ち帰ると当時の旅行者が記している。

肉の分配の慣習は古来以来、伝承されたものであり、野生動物肉の分配の慣習と関係している。猟師が捕らえた獲物を猟師全員に対し平等に分配する慣習があり、これがモンゴル人の肉の分配の慣習の起源である。モンゴル人によると、家畜の肉は64の部位に分類されるが、この部位から骨及び肉を均等に分けるのは至難の業である。猟師らは獲物の頭、皮、角などを得ることができるが、その他の肉は一般的に他人と平等に分け合う。肉の半等分、四肢肉、六肢肉、八肢肉と分割された肉は、猟師の誰であれ分配されるので、出来る限り均等な分配を重視する。肉の部位が分配される権利を伴う人々の中に、猟師だけでなく、狩猟で出会った人々も含まれる。これを串焼き肉、串焼きの分配という。これに関してはモンゴルの最古の歴史書『モンゴル秘史』に記述されている。

狩猟で射止めた肉分配の慣習は現在も失われておらず、猟師は近隣の人々に肉を分け与え、家畜を屠殺する際にも内臓肉から順に、味見の意味で与えるなどの文化が現在も存在する。また、食事する者は子どもにも必ず肉を分け与え、肩甲骨付きの肉は家庭における全員が食すなど、肉に関する様々な慣習が今なお継承されている。

モンゴル人の肉分配の文化は社会的地位、性別、年齢と関係しており、独自のコミュニケーション形態となっている。いわゆる、食す肉の部位は、食事する者の社会的地位、性別、年齢だけでなく、どの氏族かをも示す証左となっていた。モンゴルのある1つの氏族には、以下のものが存在していた。氏名、公共会議、議長、軍兵、旗、スローガン、公共の歌や踊り、戒厳令発布制度、氏族の財産、家畜の目印、慣習、肉の分配習慣である。これは人類学者Kh. ペルレー、Kh. ニャンブーなどが著書で述べていることであるが、この習慣は所属の消失と共に忘れ去られてしまった。

また、家畜の肉の部位に象徴的意味を与え、規則を守り、分配して食べることはモンゴルにおける遊牧民の社会関係を表現するものと考えられる。特定の規則に従った分配食がモンゴル遊牧民の社会生活・交流を反映している。すなわち、食肉分配の慣習において、人間と神・空・精霊など自然関係、大人と子供関係、男女関係、客と主人関係、年寄りと若者関係、奴隷と主人の関係など社会における複数の関係性が観察できるのである。

社会関係における優先順位の重要性は、食肉の分配の際にも読むことができる。もてなしを受ける客にとって、当人の社会的地位が四肢肉の抽象的な意味と一致することがあるが、現在はある程度変化している。例えば、羊の頭部が古代において宴会のごちそうであったことは、霊は頭部に宿ると考えられたことと関係している。旧暦の正月にモンゴル人は羊の頭部を神に捧げ、またシャーマニズムの宗教的行いにおいては、頭部から霊を開放するため頭部を割る文化が今なお継承されている。従って、まずは親族の上位の人・亭主・男性が羊のゆでた頭部を食べ、女性と子供は残りを受け取る。狩猟の獲物は基本的に均等に分けられるが、頭部・角・皮などは獲物を仕留めた猟師が優先的に獲得することになっていることとも関係している。家畜を屠殺した者に肉（全体）及び内臓肉が分配されるが、頭、四肢肉を与えるのはこの慣習の名残である。

分配に着目すると、食肉は大まかに、「ごちそう肉」（頭部・ランプ肉・骨

板四肢肉・肩バラ・胸部・尻尾など)、「客に与えないゆで肉」(四肢肉・顎骨肉・タン・のど肉・首肉・短カルビ・前スネ肉・骨板軟骨肉・胸骨上部の肉・膝肉・膝骨内部の油・骨盤骨肉)、「内臓肉」(血・五臓・胃袋・第一胃・第二胃)の三つに分けられる。さらに、各部位ごとに「ごちそう」としてのランクが決められている。例えば、胸部は女性もしくは尊敬する客に焼く一方で、肩バラは男性にもてなされる。客に対し、まるごとのゆで肉が出されれば、頭部の肉から第一に食べる。近所の客もしくは通りすがりの客に対しては、胸骨上部の肉・顎骨肉・タン・のど肉以外を出してもよい。客は頭部肉を食べるときは亭主に敬意を払う意味で、目を食べずに残しておく。内臓肉は先に血を食べ、肺の部分も必ず食べるなど、ごちそうに関する多くの慣習がある。

神や空・精霊にささげる肉(最初の一口)

モンゴルにおいて、人々の間での食肉の分配と同様に重要なのが、供物というかたちでなされる人と精霊との間の食肉の分配である。モンゴルの人は食べ物の最初の一口を精霊・空・山と川の神・火の神にささげる伝統があった。13世紀にモンゴルを旅行したG. ルブルックの記録には「亭主の座席の上にフェルト人形の精霊が置かれ、これを亭主の兄という。また反対側の婦人のベッドの上にあるのを婦人の兄という。これらが壁に飾ってあり、そのまたひとつ上にある小型の人形を家の精霊という」と記述されており、これらには食べ物の最初の一口を捧げる慣習について描かれている。この習慣はのちに神に食べ物の最初の一口を捧げる慣習となった。空・土・川の精霊・シャーマニズムの精霊に羊の頭部・肩バラ・骨板四肢肉・四股肉(肉全体の象徴)を捧げる慣習は、現在もモンゴルの丘を称える儀式として生きている。

もうひとつ重要な供物は、火の神に対する肉である。モンゴル人は火の神(Othan galaihan)が家庭の〈運〉を決めると考えられ、日常生活または特別の火の儀式において、短カルビ・内臓脂肪・尻尾・腎臓及び小腸の脂肪などを与える。

正月における豪華なごちそうは、人間に対するものではなく、実は神や精霊に対する供物であり、訪問先で少しだけ頂く行為は神や精霊からの恩を受けているということを示している。

子供のための肉

モンゴル人は子供にある特定の肉を与えない。例えば、脳・脊髄・骨髄を食べれば子どもは耳が聴こえにくくなる、鼻血の出血量が多くなる、頭が悪くなる、家畜の病気が移るなどの言い伝えがある。また脂ののった肉よりも内臓肉や脂のない肉を与えると、一見栄養過少の食べ物を与えているかのように見えるが、現代科学によるとそれらの肉が最も栄養豊富であることが証明されている。モンゴルの研究者によると、脂のない肉や筋肉をモンゴル相撲の力士らが肉体増強・筋力増強の栄養剤として食すとしている[3]。

表1. 家畜内臓肉のミネラル含有量(mg%)

栄養分	心臓	腎臓	肝臓	肺	脾臓	第一胃	胃袋	第二胃
牛の内臓肉								
K	54.5	54.5	56.5	53.0	59.04	47.0	43.0	24.67
Na	60.0	62.5	57.17	62.01	55.28	32.0	59.0	39.3
Mg	10.5	10.67	7.67	9.0	8.28	5.0	7.8	5.8
Ca	1.85	6.0	1.0	4.68	1.3	6.2	6.5	7.0
Fe	9.83	9.05	8.26	13.05	71.9	3.4	10.9	10.1
Cu	0.9	0.96	2.73	0.87	0.54	0.53	0.53	0.53
Zn	2.12	3.4	3.63	2.5	2.53	2.3	1.97	2.41

その他、女の子に羊の上顎肉を与える際に「針仕事が上手になれ」、「折りたたみが上手になれ」というのは、上あごの模様のように上手に物事をこなせるようにという願いを示している。出産児の洗礼式のとき、尻尾の肉のほか、右の脛を「赤ちゃん用」として取っておき、あとで母親が食べ、くるぶしの骨を剥がさず、箱に入れて保存する[4]。モンゴルの象徴的慣習において、すね骨や首骨などの間接を伴う骨を分離せず保つことは、離別のない強固な関係を意味する。男の子に仔羊の精巣を与えるのは伝統医療の意味がある。心膜心臓・腎臓・胃腸・タンなどは子供用としては食べなかった。

母方の血縁者のための肉

モンゴルは基本的に母方の血縁者を尊敬し、その人の前では肩バラ肉を食べない、姪甥の隣で心膜を食べないなどの慣習がある。一方、父方の血縁者用の肉が存在しないのは興味深い。

女性のための肉

女性は胸骨、背尻尾（ブリヤート族の場合）、肛門（モンゴル人は「白い肉」という）、頭、上顎、脛骨、脛骨の穴の肉までは食べるが、乳房だけは食べない。

男性のための肉

男性は頭、仔羊の精巣を食べるが、脛骨の穴の肉は食すことが禁じられている。

奴隷が食べるのは橈（とう）骨（こつ）であり、モンゴル人が食さない肉は脾臓（モンゴルの西では食べられる）、胃の結び目、肝臓内部の水腫、脛骨肉の腺、額、短カルビ、くるぶしの皮、胚胎（胎児がいる場合）、舌先、骨板軟骨である。

結論から言えば、モンゴルの食肉分配の慣習の特徴は、古代の社会関係、家庭・親族・神秘的関係の要素を含んだ象徴的、かつタブーの慣習からなる、完全なシステムとなっていることである。

要約

本稿はモンゴル人の伝統的な食の分配について、とりわけ肉に焦点を当てて論じたものである。肉の分配はあらゆる慣習、社会的地位や宗教信仰、親族関係などの鏡である。すなわち、様々な社会的関係、高齢者と若者、親子、身分の高い者と低い者、神と人間などを読み解くことができるのである。羊の身体の各部位には、象徴的意味があるため、羊肉の提示、調理、分配には特別な慣習、規則、禁忌が存在する。この慣習は組織内の社会的関係や特徴を象る。現在では新年の祝祭、例えばツァガーンサルなどにおいて継承されている。

注

1　この考えは、現在の遊牧民においても生きており、モンゴルの遊牧民は家畜の全部位を重宝することが読み取れる。腺すらも捨てず、犬の餌になる。家畜の呼吸のほかは全て利用すべきだという考えは、自然を保護し、自然に適応しつつ生きる文化の重要な証拠である。これは仏教におけるアヒムサー及びカルマ的思想の影響が考えられるが、必要のないときの娯楽として動物を狩猟しない慣習は、遙か昔から遊牧民が継承してきたイデオロギーと関係している。一旦家畜を屠殺するとその肉を食べ、可能な限りすべてを利用することは、モンゴル仏教では家畜の生命を絶った罪を懺悔する方法の一つであると言われており、現在も大人から子どもたちへ語り継がれている。

2　「まだらの馬」を昔はモンゴルで貧しい人々の飼う馬と示しており、もしまだらの馬を飼う家庭は貧困、あるいは家畜の頭数の減少などが起こり、貧困化していることを意味する。また、「まだらのお椀」とは食で人々を差別するというのは最も卑しいことであり、人間をこのように区別するよりも貧しくなる方がましだということを意味している。

3　O. バヤルサイハンなど『家畜の内臓の栄養成分の医学的結果の研究』2007年 http://www.mongolmed.mn/article/47

4　Kh. ニャンブー『モンゴル慣習大事典』ウランバートル、1992年、397頁 Х.Нямбуу “Монгол ёс заншлын их тайлбар толь” УБ., 1992. 397 тал